

補遺 学部長就任の挨拶にかえて

「日本も世界も、もっと美しさが

必要だと思ったら」

—富山大学 芸術文化学部は知性と感性を融合します—

富山大学 芸術文化学部長 前田一樹



芸術文化学部は、我が国でも有数の伝統的工芸の本拠地である、工芸都市高岡にキャンパスを置いています。高岡は日本の歴史や文化が、長く息づいている町であり、様々な行事や祭事が続けられています。それらを支えてきたのは地域の人々であり、技術や知恵の伝承者としての、作家や職人達でもあります。今も多くの人々がその一流の技術を活かし制作を続けています。またその反面、個人の活動とは違い、世界から注目を浴びる企業があります。ニューヨークの近代美術館から出品依頼を受けるエポックメイキングな製品開発をする企業や、世界のF1のレーシングチームから、アルミホイールの製造開発を依頼される国際的な技術力を持った、トップメーカーも存在しています。発想力や技術力を有するオンリーワン企業は、いまや世界とダイレクトに繋がり更なるビジネスや技術開発が行われています。これらの企業は伝統の継承と共に、知や夢の拡大とその実現化に向けて革新的な挑戦と努力を続けています。これらの企業や職人の現場を数多く持つ「町に学び」「人に学び」ながら、創り手として、また使い手として幅広く海外の大学や異文化と連携しながら、学際的研究と国際的視野に立ち、明日の日本の文化を創新する個性豊かな「人材」の育成に努めたいと考えています。

「富山県や高岡市が学生を育てるキャンパスです」

都市には様々な「時代の文化」があります。建築、アート、メディア、ファッション、食、文化イベント等、毎日見たり、聞いたり、触れたり五感から直に刺激を受けており、クリエイターを志す人達にとっては、とても大事な要素であると思います。また、新しい技術、新しい素材、時代の先端に行く様々な文化活動にも参加できます。残念ながら地方都市にあっては、この様なものに直に触れ体感し、感動する機会は少なく、本物とはかけ離れたバーチャルな世界からの知識が主な情報源になりが

ちです。一方、クリエイターとして育つためには、何が必要な要素で、創作意欲をかき立てるものとは何か、発想の源になりうるものは何か、を考えてみたいと思います。

それは決して都市で人が創り出した人工的世界だけではないように思えます。地方都市では自然の現象や伝統文化の世界を五感で体感でき、それが心の中に創造性を育む要素として徐々に蓄積されます。四季が作り出す景色、季節の暮らしの変化、手にとり、口にする事が出来る食材、その新鮮な姿、厳しい気候・風土から生まれた生活の知恵、観光目的のイベントではない暮らしに即した行事など、これらをリアリティーのある形で実感できます。

この様な立地を持つ本学部は、日本の原風景を直に感じる事ができる数少ない総合大学の中の芸術文化学部と言えます。

「ローカルこそグローバル」

世界が日本の芸術文化を取り入れはじめています。長い歴史の経過が地に着いた日本の職人文化を進化させ、その道程はいつしか地域の自然と共生し、限りある資源の循環を取り込んだ機能美を生み出しました。今これらの日本文化の考え方が世界にとって大きな価値を持ちはじめています。ファーストからスローへの新しい価値の創造に見られるように、自然のリズムを超えた加速の時代から、大きく逆方向に時代の振り子が振れ始めています。

芸術文化学部は今後の日本の発展に、これらの推進役としての責務を負っているように思えます。世界が求める新しい価値の創造と、地域の国際化の両面を当面の目標と考えています。人と文化を育む芸術文化学部のキャンパスは、大学であり、工芸都市高岡であり、富山県です。都会が創る感性とは違う、「地方がチャーミング」に感じられる、生活者の新たな価値の創造こそ、今後の日本の発展を支える重要な柱の一つと考えています。

編集後記

高岡短期大学が創設されてから平成17年で満22年が経ちました。平成17年9月30日に高岡短期大学はその看板を下ろし、10月1日から富山大学芸術文化学部として再出発することになりました。これを機会に記念誌「高岡短期大学22年の歩み」を編纂することになりました。その趣旨は、西頭徳三学長が本誌の巻頭言で述べておられる通りであります。

記念誌は第1部―回想編、第2部―資料編の2分冊にすることが決定されました。第1部「回想編―二上キャンパスへの想い―」は関係各位のご協力の下に平成17年9月30日付けで無事刊行することが出来ました。また、第2部「資料編―創設から芸術文化学部の開設まで―」も予定通り平成18年3月1日に発刊することが出来ました。第2部―資料編の各項目について解説を分担執筆していただきました教職員の皆様、そして編纂作業に携わられた編纂委員各位の積極的なご協力に心から感謝申し上げます。

高岡短期大学の閉学と新しい富山大学芸術文化学部への移行を契機に編纂いたしました、この記念誌を末永く皆様方のお手元にお留め頂き、高岡短期大学時代の歴史とその思い出を懐かしんで頂けましたならば記念誌編纂委員一同この上ない喜びといたすところであります。

学内外にわたる多方面の多くの方々、西頭学長を初めとする教職員の皆様、そして卒業生や在学生の皆様からのご協力とご支援を頂きましたことに心から感謝いたしております。

なお、至らぬところが今後多々出てくるかと存じますが、これ全て委員長ご責任に帰するところであります。その節はどうかご叱咤の後、寛容なご配慮とご容赦を頂戴いたしたいと切に願っております。

これをおもちまして、記念誌編纂委員会を解散させていただきます。有難うございました。(横田記)

記念誌編纂委員会

(委員) 安達博文 磯部祐子 沖 和宏 久保欣五 高橋誠一 立浪 勝
堀江秀夫 ○宮崎雅司 村上恭子 ◎横田 勝 吉田俊六
(◎委員長、○副委員長)
(編集補佐員) 川上涼子

高岡短期大学二十二年の歩み

第2部 資料編―創設から芸術文化学部の開設まで―

平成18年3月1日発行

編集 記念誌「高岡短期大学二十二年の歩み」編纂委員会
発行 国立大学法人 高岡短期大学
〒933-8588 富山県高岡市二上町180番地
電話 0766-25-9111(代表)

印刷 能登印刷株式会社

表紙デザイン 専攻科 産業デザイン専攻1年生 岸本万由子
